

国際学会出席旅行記

I

初めての海外旅行

鈴木 洋

第8回ICPEAC、ベオグラード（ユーゴスラビア）

1973年7月、これが国際学会出席のための初めての海外旅行でした。上智大学に原子物理学研究室を開業してから約10年、やっとICPEACで発表できるような実験結果が得られるようになり、この会議に出席することになったのです。ICPEACはInternational Conference on the Physics of Electronic and Atomic Collisions（電子や原子の衝突に関する物理学の国際会議）の略称で、原子・分子やそのイオン・電子などを含む衝突過程に関する物理学を扱う一番大きな国際学会です。

南回りでまずローマへ

7月13日に羽田国際空港を出発。南回りのルフトハンザ（ドイツ）航空に搭乗。同じ研究分野の日本からの参加者、織田暢夫・蟻川達男・鶴淵誠二などの諸氏と御一緒でした。この機は途中、香港・バンコック・デーリ・クウェートに着陸し、それぞれの空港の待合い室や売店を見物できるのはよかったです。離陸するたびに新しく食事が運ばれてくるので、はじめは物珍しくてなかなか美味しく感じた機内食もインド大陸の上空を飛んでいる頃はなにか反感を感じてきて、眠れないまま父母や家内にあてて書いた絵葉書には、こんなことを書きました。「何億の人々が餓えに苦しんでいるというインド大陸の上を、食べ切れないほどの機内食を前に今うんざりしながら飛んでいます」。絵葉書はボーイング747ジャンボジェット機の見事な写真を載せたものでした。これはクウェート空港の待合い室で投函しました。

われわれのルフトハンザ機は14日朝早くローマ空港に着きました。

ローマを1日だけ観光

ローマ空港からユーゴスラビア航空でベオグラードへ飛ぶ予定は15日の朝なので、1日だけローマを見物できることになります。宿はテルミニ駅の近くに予約されていたので、そこにチェックインして後早速出かけました。数人でまずトレビの泉を見物し、コインも投げ入れました。新婚ほやほやの鶴淵氏夫妻はワインカラーのペアルックに身を包みたいへん御機嫌でした。泉を見下ろす軽食堂でスパゲッティボンゴレを食べました。ここで別れてからは一人で無我夢中で歩き回りました。歩いてサンピエトロ寺院へ行き、ピエタ（Pieta、聖母マリアがキリストの亡きがらを抱きかかえている有名な像、ミケランジェロの作）を始め寺院の内部の崇高な美術品の数々に驚き、ドーム内の広大さ荘重

さに驚き、その上ヴァチカンの全貌、ローマ市街の遠望も見たいものと、塔の天辺まで階段を駆け上りました。シチリアから来たという年輩の女性達の一団と結構話しがはずみました。その後はバスでコロッセオ（古代ローマの円形競技場の跡）まで行ったり、その他幾つかの寺院のゴティック風の尖塔を観賞しながら、夏の遅い夕暮れ迄歩き回りました。

宿の寝室は暑苦しく、開けた窓からは一晩中街の男女が騒ぎ回る喧噪が襲ってきます。町中が重厚な美術館・博物館のような格調高いローマの印象と、街角で一晩中騒ぎ回る若者達の軽薄の雑音が入り混じって、寝苦しい一夜でした。

ローマからベオグラードへ

7月15日朝、ユーゴスラビア航空に搭乗しローマから、ベオグラードに飛びます。昨夜遅くまでローマの歓楽街を探訪した、豪傑連はたいへん名残り惜しそうな風情でした。飛行機が紺青のアドリア海を横切ってもうじきバルカン半島の陸地にさしかかる頃、ベオグラードまではまだ1時間以上あるだろうなどと考えていた時、突然けたたましくスチュアーデスが何やら叫び出しました。英語のようですが全然聞き取れません。窓から見ると飛行機は海面すれすれに飛んでいるではありませんか。これは不時着をするのかしらと思いました。ベルトを締めて、ペンやその他尖ったものはみな体から離しました。不時着の衝撃を免れる為、そうするのがよいと何かで読んだような気がします。

しかし、飛行機は海岸線を越えて、広い陸地にすんなり着陸してくれました。ここはスプリット（現在はクロアティア共和国領、バルカン半島屈指の夏の保養地だそうです）の飛行場だったのです。ベオグラード行と掲示されていた便ですから、こんな小さな飛行場に降りるとは予想していなかったので、驚かされました。ユーゴスラビアへの入国手続きはここで済ませました。当時、東欧圏で日本からビザ（査証）なしで入国できるのは、ユーゴスラビアだけでした。ソヴィエトと一線を画していた唯一の東欧社会主义国だったのです。われわれのユーゴスラビア航空はスプリットで別のマシンに乗り換えてさらに、ザグレブ（現在のクロアチア共和国の首都）まで行きました。ベオグラードとはほとんど反対の方向です。結局、ローマ・スプリット・ザグレブ・ベオグラードと飛んだわけです。

1. ICPEAC学会へ登録・宿舎に入る

ベオグラード空港では女性の税関係官の横柄な態度にちょっとびっくりしましたが、会議のローカルコミッティの手配してくれたバスで無事、ひとまず会議場に到着しました。会場はベオグラードの新市街にドナウ河を背景に堂々とそびえ建つ ホテルユーゴスラヴィアです。早速参加登録を済ませ、簡単なレセプションを覗きに行きます。

大多数の会議参加者は、ここホテルユーゴスラヴィアに宿泊したようですが、私は渡部力氏（当時東大工学部、この旅では万事氏のガイドに従って行動しました）と相部屋で、ホテルノーヴィーベオグラードに泊まりました。やはりベオグラードの新市街にあり、会場から歩いて15分位のところに在ったよ

うに思います。ロビーに小さな万国旗が飾られていたりして、近くで行なわれた国際的イベントを意識してはいるようでしたが、普段はこの首都を訪れるビジネスマン等が泊まる宿らしく、頑丈で質素な感じでした。後で聞いたことがですが、この夜ホテルユゴスラヴィアでは（たぶん客が満杯になるのが稀な為でしょう）シャワーが出なくなり参加者たちが大騒ぎをしたそうですが、ここノーヴィーベオグラードではシャワーを満開にすると体ごとぶち飛ばされるくらいの勢いでお湯がです。ただ困ることは、洗面の鏡が高いところに付いていて、精一杯背伸びをしないと自分の顔が写らない。バスタオルは思いきりごわごわしていて、ごしごし拭こうとすると体に傷が付くのではないかと思えるほどでした。

その夜は夕食を渡部氏とノーヴィーベオグラードの食堂で取りました。分量が多くすぎて食べ切れないのが困のですが、食事の味も大味ながらなかなか美味しいし、ウェイトレスの女性は地味な身なりながら楚々として美しく、キムノヴァックに似ているねなどと渡部氏と囁きながら、たいへん佳い気持ちでした。支払いの時、チップを上げなくちゃというので、若干はずんだ積もりでコインを付け加えてみました。食堂を出る時は、何人かのウェイターとウェイトレスが列んでにこやかに見送ってくれました。しかし無知とは恐ろしいもので、後から分かってみるとこのコインは日本円で5円に相当するものだったようです。思い出すと、いまでも恥ずかしくなります。

学会始まる

ICPEACではふつう、総合講演 (review paper) 、成果報告 (progress report) および投稿論文 (contributed paper) の発表が行われます。前の2つはプログラム委員会によって選ばれて依頼されるもので、招待講演と呼ばれます。私はこの会では投稿論文「ヘリウム原子の電子衝突（衝突エネルギー50~500eV）による主量子数2の状態の励起微分断面積の測定」を発表しました。15分間の講演でした。これは主に高柳俊暢君の実験結果で、彼のドクター論文の要約のようなものであったと思います。この仕事は、当時はまだ新しかった電子エネルギー損失スペクトル法を使って、電子衝突によるヘリウムの基底状態 1^1S から、 2^3S , 2^1S , 2^3P , 2^1P の4つの励起状態への励起微分断面積を、衝突エネルギーごとに散乱角の関数として測定したもので、新しい実験的知見を豊富に含んだ研究結果であったと思います[1]。講演の後の討論では、2~3の理論家が熱心に質問してくれました。

投稿論文についてはその要約集(Abstracts of Contributed Papers)が既に印刷されていて、会議の際参加者に配られます。招待講演については、Proceedingsが1年後くらいに立派な本になって配られます。此の会議のアカデミックな内容については、「第8回原子衝突国際会議」という4ページの紹介記事が日本物理学会誌に載っています[2]。

会議のバンケットはたいへん印象的でした。郊外の丘の上に陣取った古いお城のテラスで篝火を焚いて、ハンガリアン舞曲に似た伴奏のなか、槍の先に焼いたマトンを突き刺したものを担いだ男たちが行進して現れます。男の蛮風を誇りとする風習があるのでしょうか。お伽噺の世界でした。テラスから見下ろ

す村々の灯りも美しく、宴会は深夜まで続きました。

この夜はバスで全員をホテルユゴースラヴィアまで送ってくれたのですが、私はホテルノーヴィベオグラードまで深夜ひとりで歩いて帰る道、道に迷ってしまいました。治安はたいへん良いと聞いていたので心配はしなかったのですが、広い新開地で目印もありません。そこへ向こうの方に警官らしい人が歩いているのを見付けたので、ほっとして追いかけました。”Hello! Mr. Policeman! Hello!”すると警官は足早に逃げてゆくではありませんか。どうも英語が嫌いらしい。ユーゴーではドイツ語のほうが普及していると聞いていたので、”Bitte! Herr Polizist! Bitte!”とやってみましたが、相手はどんどん逃げてゆきます。とうとう警官を取り逃がしてしまいました。どうやら、この近所で国際会議があつて、外人が大勢やってくると聞いていたお巡りさんが、面倒なやりとりを嫌つて逃げてしまったのでしょうか。お巡りさんに逃げられてしまって、途方に暮れているうち、運良く数人の若者たちが、まだ若い並木に消防のホースのような太いパイプで盛大に水をかけてやっているところに出会いました。この人達にホテルノーヴィベオグラードはどちらでしょうと聞くと、一人がホテルの近くまでわざわざ連れて行ってくれました。この若者たちは道路の整備を職業とする人々ではなく、ボランティアで新しい地区の整備を手掛けている若者のグループの人々と思われます。なにかいそいそとした意気込みが感じられ、社会主義の国の若者の良い面を見たようないい感じでした。

ベオグラードでの1週間

ベオグラードの旧市街は古い東欧の街の重厚さをもつ、渋い美しさの街です。私達は毎夕のように旧市街へ夕食を食べに通いました。特に印象に残ったのはベオグラードの中心街の或る狭いストリートです。たしかスカダーリアと呼ばれていたとおもいますが、いま資料が手元にないので確かではありません。お祭りでもないのに、夏の夕方、町中の大人達がここへやってくるのではないかと思うほど混みあっています。道にあふれるほどの男女が腕を組んでこの通りを往復しています。連れのない人は通りに沿った低い石の縁に座って通る人を眺めています。通りに沿って列んだ店々の前にはそれぞれ空き地があって、通りに沿ってびっしりと列んだレストランやビストロでは戸外にテーブルを並べてワインや食事を饗しています。どこもほとんど満席です。食事やワインの値段は当時のまだ強くなかった日本円からみても、驚くほど安くて、平気で豪遊できるのが幸せでした。オードブル（あるいはサラダ）とメインディッシュを取り、たらふくワインを飲んでも、たしか1500円もかからなかったと思います。それでも、かえってアメリカから来た連中は高い高いなどと言って騒いでいます。東欧圏の経済がよほど疲弊していると思いこんでいたのでしょう。

ベオグラードのバスは大型トラックの荷台に床と屋根をつけたような感じで、床にスプリングが付いていないのか、突き上げるように激しく揺れます。スカダーリアに行くために乗ったバスの中で、例によってバスのつり革に手が届かないでの、バスが曲がるはずみによろけて隣の大男の足をいやというほど踏んづけてしまいました。シュルディギング・パルドン・ソリーソリーと平身低頭あやまつたのですが、大男はさぞ痛かったと思うのですが、にこにこしながら、

なにやらかおおげさなジェスチュアをするのです。よく見るとつり革につかまっている自分の腕を示して、ここへ捆まれと言っているのです。セルビアの男のおおらかさというのでしょうか。時代は変わりますが、旧ユーゴ紛争（1994年ボスニア紛争；1999年コソボ紛争）の際ベオグラードやセルビア人地区を無差別爆撃した米欧の政治家や軍人たちをたやすく許す気にはなりません。

初めてのヨーロッパ旅行・しかも全額家のお金（私費）を持ち出して出かけた旅行ですので、家内と娘たちにお土産を探すのは大事な仕事です。昼間にフリーになった日には旧市街へ出かけてお土産探しです。昔の西洋の軍人の大礼服などに似た大柄な装飾の付いた女性用の民族衣装など、欲しい物は沢山見つかったのですが、この先まだ何遍も飛行機を乗り換える予定があり、チェックインできる荷物の重量制限が20kgですので、あまり重い物やがさばるものは買えません。幸いかわいい絵柄の丁寧な刺繡をした木綿の婦人用のブラウスなどは手頃です。それと、東欧風の野趣のある銅でできた大柄なネックレスなどがなかなか良くて、しかもたいへん安く手に入りました。これらを家内と2人の娘の分買い込みます。

1週間の会議を終えて、7月22日（日）にベオグラードからロンドンヒースローへ飛びました。

2. ロンドン大学Royal Halloway College でのサテライトミーティング

ロンドンで一泊して翌日列車でEghamという駅へ行き、田舎道を歩いて、ロイヤル・ハロウェイ・カレッジのゲストハウスに入りました。このカレッジはもとロンドン大学の女子部だったそうで、キャンパスの中央には学生寮と大教室を兼ねた赤煉瓦造りの美しいお城のような建物がそびえています。キャンパスのあちこちにすこしきめの住宅程度の2～3階建ての建物が配置され、そのうちの一つは音楽学部だということでした。

このキャンパスのゲストハウスでICPEACのサテライト・ミーティングのひとつ、電子散乱研究の小規模なシンポジューム（たしか、Impact Ionization Conferenceという名だったと思います）が開かれました。会期は7月23日（月）の夕方から26日（木）でした。この会合への出席は渡部氏の薦めによるもので、日本人の出席者は渡部氏と私の二人だけでした。

ゲストハウスは本館とは別棟のたしか2階建ての瀟洒な別荘風の建物でした。当時イギリスでは夕方は午後7時にならないとパブを開いてはいけないという規則があり、ここもゲストハウスでも規則が守られています。シンポジュームはかなりinformalな感じで、討論時間などの制限がゆるいせいか、夕方遅くまで続きます。そのため、7時になると急に会場の後ろの方が騒がしくなって、パブから持ってきたビールのジョッキーを片手に、質問したり、私語をかわしたりする人が現れるのです。アメリカ人で当時鋭い仕事ぶりで鳴らしていた理論家（名前はたしかガージョイといわれたと思います。この人は一通り電子散乱の優れた理論の論文を書いた後に、科学者を辞めて弁護士になってしまったと聞きました）が毎日昼と夕方とパブが開くたびに後ろの方でビールを飲んでは談論風発していたのが一番記憶に残っています。

このシンポジウムで私は各国から集まった電子衝突研究者の前で、ちょっと良い格好をさせて貰える幸運に恵まれました。ちょうどこの頃私自身一番興味を持っていた問題として、ヘリウムの2電子励起状態の電子分光による研究がありました。電子衝突により創られるヘリウム原子の2電子励起状態が自動電離を起こして出てくる放出電子のエネルギースペクトルの測定です。私自身で夢中になって測定した、一連の測定結果を、まだ発表するには十分ではないとは思いながら、この旅行に持っていました。このことを渡部氏に話すと、氏は是非それをここで発表しなさいと勧めてくれ、主催者に申し込んでくれたのです。おかげで、飛び入りで20分ほどの講演をする機会を与えられました。私の順番がくる前に偶然にも、ドイツのハーンマイトナー研究所から来たシュトルタフォート(Stolterfoht)という人がプログラムに従ってヘリウム原子の2電子励起の実験結果を話すことになっていたのです。私はこの講演が始まるまでは少々不安でしたが、始まってみるとすっかり安心しました。彼のアナライザーは少々お粗末で、分解能も貧弱だったし、実験した電子の衝突エネルギーや観測角度の範囲も不十分なもので、まだ予備実験の段階としか云えません。

私達の測定では、電子の衝突エネルギーが比較的高い場合には、ヘリウム原子の2電子励起状態として、 $(2s^2)^1S$, $(2p^2)^1D$, $(2s2p)^1P$ とそれに続く系列から放出される自動電離電子のスペクトルが観測されます。また、衝突電子のエネルギーを(80eV位まで)低くしてゆくと、 $(2s^2)^1S$ のすぐ上に $(2s2p)^3P$ 状態からの鋭い放出電子ピークが観測されます。また、衝突電子エネルギーや観測角を広い範囲で変化させると、電子スペクトルの形(Fano profile)が激しく劇的な変化を示すことを観測しておりました。

ところがシュトルタフォート氏は、電子衝撃により創られるヘリウム2電子励起状態の意義や自動電離電子スペクトルのスペクトル形(プロファイル)の意義についていろいろ話した末、見せたスペクトルでは 1D 状態は分解されておらず、また 3P 状態からのピークも観測されておりません。講演では、 1D 状態はこの辺りにあるので分解能が良くなれば分解できるはずだとか、低エネルギー衝突では 3P 状態が現れるはずだ、とかいうような予測を述べただけでした。気の毒にも彼は私の発表の前座・引き立て役をやってくれたようなことになってしまいました。

私の番がくると、私はこの若手の秀才のプライドを傷つけないように注意しながら、まだ、一連の実験予定が終わっていないので、informalな発表であると断りながら、衝突電子エネルギー70 eV ~ 500 eV、観測角30° ~ 120°の範囲での測定結果を見せて、自動電離電子スペクトルが衝突電子エネルギーと観測角によってどのような目覚ましい変化を見せるかを誇示することができました。

この発表の後、すごくハンサムな若い理論家が近づいてきて、たいへん丁寧な様子で私になにやら頼むのですが、よく分かりません。ここでも渡部氏の助言で助けられました。彼は私のスペクトルをコピーさせてくれと言っていたのです。アメリカではコピーのことをカッピーと言うのだと初めて知りました。その後、このStolterfoht氏はイオン一原子分子衝突と電子スペクトル測定とを組み合わせた実験で、イオン源を持つ方々の研究所を渡り歩いて、なかなか斬新

な仕事を精力的にやって歩くアイディアマンだと分かりました。学会の度に会う機会があり、後に上智大学へも訪問してくれて、セミナーをやってもらったことがありました。電子スペクトル測定の分解能の点では上智大学の技術に終に及ばず、会うたびに「あんたのところは分解能がよいからなあ」と一種のコンプレックスを持ち続けていたようでした。

余談ですが、シュトルタフオート氏が2度目に上智大学に来てくれたとき、赤ちゃんを乳母車に載せて現れました。彼も遠慮しながら、「このビルディングはベビーは**forbidden**かと聞きますので、no, allowedですと答えると、セミナーをやる部屋まで連れてきてしまいました。若い（2度目の）奥さんも一緒です。彼は、この子はシンプルだから大丈夫だなどと言っておられたのですが、セミナーが始まるとすぐに泣き出してしまったので、急遽別室を用意して、英語を話せる女子の学生さんに頼んでお相手をしてもらいました。シュトルタフオート氏は標準的なドイツ人とは少し変わっていて、初めの子も西ベルリンのアメリカンスクールへ通わせていたし、友人もフランス人やアメリカ人が多かったようです。

このシンポジウムは田園の中の静かなキャンパスでせいぜい40～50人の研究者が泊まりこみでそれぞれの最近の仕事の成果を持ち寄って、討論するという雰囲気で、楽しいものでした。皆たいへんリラックスして過ごしているようでした。印象的だったのは、フランスから来たマダム・ファイアール(Mme Fayard)などは、プログラムの合間に、外へ出る低い階段に腰掛けて、陽に当たりながら小説のようなものを読んでおられるようでした。楽しい集まりでした。

3. ドイツの大学訪問

フライブルク

私は子供の頃から父のドイツびいきに洗脳されておりましたので、この機会を利用して、どうしてもドイツの大学をいくつか訪問したいと考えました。28日にロンドンを発って、Túrich(チューリッヒ)に飛び、そこから列車でFreiburg(フライブルク)に行きました。30日(月)手紙で訪問を申し込みであったProfessor Mehlhorn(メールホルン教授)へホテルから電話をかけたのですが、私の英語がたどたどしかったせいか、教授自身が車でホテルまで迎えに来てくくれて、ひとりで初めての大学研究室訪問が無事うまくゆきました。メールホルン教授は、Auger(オージェ)効果研究の大家で、電子衝突・イオン衝突・シンクロトロン放射光照射などによるオージェ効果の電子スペクトルによる研究を多数発表しているグループのリーダーで、しかもたいへん親切な人格者であるという評判を聞いていたことと、フライブルクという街が奈良のようなところだよと父から聞いていたのが、この大学を真っ先に選んだ理由でした。

フライブルク大学は古くからある名門の大学で、第2次大戦後創られた新制の大学と異なり、一学科に教授は1人か2人しかおられません。物理学科も実験と理論に1人づつの教授がいるだけで、原子衝突物理の分野ではすでに世界的に有名だったNiehaus氏やMorgenstern氏でさえまだ講師かなにかでおられたようです。（この両氏は後にオランダのライデン大学の教授に迎えられました。）

メールホルン先生は期待したとおりたいへん友好的でかつ親切に迎えてくれ、研究室を詳しく案内してくれ、また私のやっていることなどを興味深く聞いてくれました。物理教室そのものは、建物の大きくて頑丈なこと、研究室の部屋が大きく電力や排気など基礎設備がしっかりしていることなどでは、たいへん感心しましたが、親切に詳しく案内して頂いた、実験装置は決して驚くほど立派とはいえません。オージェ効果の研究用の数10キロ電子ボルトのイオン源、軌道半径が10數cmの真鍮製の共軸円筒型の電子エネルギー分析器などを見学しても、なぜかちょっとお気の毒なような感じを持ったくらいでした。私が持って行ってお見せした自分たちの最近の実験データ（ヘリウム原子の 2^3S , 2^1S , 2^3P , 2^1P 状態への電子衝突による励起微分断面積と一般化振動子強度のデータ）にはたいへん興味をもってくれ、このグラフをコピーさせてくれないか、原子衝突物理の講義のとき学生に見せたいから、などとたいへん褒めてくれさえしました。メールホルン先生と話しているときに、若い大学院学生が現れて、サクレー（フランス）でのマシンタイムに参加してやってきたシンクロトロン放射光の実験の報告をしていましたが、この時のシュミットという学生さんは後に放射光の実験で有名になり、立派な教科書を書いているあのSchmidtです。

また、嬉しかったことは、その日昼食時先生の自宅へ招待してくれたことです。お宅はちょうど家が建って引っ越したばかりで、まだ庭ができていない状態でした。奥様もたいへん友好的で、いろいろ日本の文化的なことを聞いてくれたりして、私も慣れない英語で京都や奈良のお寺や仏像のことなどを話したような記憶があります。

カイザースラウテルン

この旅行では日本からユーレイルパスを買っていったので、ヨーロッパ大陸に限り列車に乗り放題（しかも1等車で）でしたので、夜行列車を乗り継いで、Kaiserslautern（カイザースラウテルン）へたどり着きました。この町はRheinland-Pfaltz州にあって、いわゆるPfälzerwald（パルツの森）の入り口に位置し、人口10万の都市ですが、近くに米軍の水爆基地があるということでした。ここの大手は第2次大戦後建てられた新制大学で、当時はUniversität Trier-Kaiserslauternと云われていました。この大学の物理学科の教授で学長を兼ねておられたEhrhardt（エアハルト）教授が、電子衝突実験研究のヨーロッパでの第1人者であり、数年前日本で質量分析の国際学会があったとき来日され、上智大学にも一度訪問を受けて、低エネルギー電子のエネルギー分析技術についていろいろ教えて頂いたこともあった方でしたから、是非この機会に、研究室を見学したかったです。

エアハルト教授は不在で、エアハルト研究室は助手のJung（ユンク）氏が案内してくれました。有名な2電子コインシデンス実験装置・1ミリ電子ボルトの超高分解能をねらった電子スペクトロメーター装置（装置全体が電波暗室の中に設置されている）、その他の低エネルギー用の小型装置など、全てたいへん印象的でした。つぎにHertel（ハーテル）教授（まだ30代で教授になりたての人）のレーザー励起された原子の電子散乱実験装置（レーザーで励起されたNa原子の電子との超弹性散乱など、当時原子衝突物理の理論家の仲間ではたいへんな

評判を得ていた実験でした)を見学しました。またGeiger教授(ガイガーカウンターで有名なHans Geigerの子息)の研究室では若い感じの良い講師の方

(Schräder氏といわれたと思います)が案内してくれました。こちらはベルリンから引っ越してきたばかりでまだ装置が整っておらず、ごく小規模の手製の電子顕微鏡か電子回折装置のような縦型の装置があるだけで、なにか気の毒な感じでした。後で聞いた噂では、ガイガー教授はベルリンでたいへん有力なB教授のもとで優れた実験(数10 keVの電子のヘリウムとの衝突によるエネルギー損失スペクトルをウイーンフィルターを使って測定した実験は当時有名でした)をしていたのですが、B教授は思いやりのない人で、ガイガー氏がカイザースラウテルンの教授に赴任することになつても、ガイガー氏がベルリンの研究室で制作した装置を何一つ持たせてくれず、そのためにここでは装置ゼロから出発しなければならなかつたということです。

その夜はこの町の小さなホテルに一泊して、翌日列車でハイデルベルクを経てハンブルクへ行き、8月2日ハンブルク空港からルフトハンザ航空に搭乗し日本に向け帰途につきました。初めての外国旅行で、3週間におよぶ充実した忙しい日程でした。8月3日羽田空港へ無事帰着した次第です。

参考文献

- 1) Measurement of Differential Cross Sections for Excitation of the n=2 States in He by Electron Collision in the Energy Region from 50 to 500 eV:
H.Suzuki and T.Takayanagi, Proceedings of the Eighth International Conference on the Physics of Electronic and Atomic Collisions, Abstracts of Contributed Papers, Beograd, 1973, (North-Holland, Amsterdam, 1973) pp.286-287.
- 2) 「第8回原子衝突国際会議」、
金子洋三郎・渡部 力・小寺熊三郎・織田暢夫・鈴木 洋: 日本物理学会 誌
29(1974) 177-180.